

之を施し難きものなるか、是須らく教育上研究を要すべき大問題なりとす、此等の事は追て他日に譲り今は唯見聞の一端を記述せるに過ぎざるのみ (完)

⑤ 教師および授業

『美術旬報』に明治三十五年入学、同四十年彫刻科卒業と思われる人の教師や授業に関する回想記が載っているので転載する。前半は第五百十七号(大正七年四月十九日)に、後半すなわち「◎デッサンの時に」以下は第五百十八号(同年五月九日)に掲載されたものである。「」は編者による補足または訂正である。なお、参考までに言えば、この年度の彫刻科生徒は小倉右一郎・勝尾準太郎・加藤直泰・武田榮・中村武平・藤井浩祐・吉田祥三・吉田政一・朝倉文夫(撰科)、池田勇八(同)、佐野長吉(同)である

十五年前の美術學校生活

黒旋風

◎私が美術學校へ入學したのは三十四五年頃でした。其頃の學校は勿論舊館であつて、今は市區改正の爲にスツカリ變つてしまつた。回顧すれば十五年、「マ」前地方の學校を出たての田舎者が、始めて上野廣小路から公園にやつて來た時には、流石は我國美術の最高學府に所ありと思つて實に嬉しかつた。年頃此學校へ入學せんものと憧憬(あしがれ)てゐたのも當然な理想であつたと思つた。でも入學して見ると其頃は假入學と云つて塑造と、木炭畫と、日本畫とを一週間宛習ふのであつた。木炭畫は岡田「三郎助」先生で洋行歸りのホヤ／＼で生徒に大持(おおも)であつた。先生も其頃はまだ若くフラ

ンス歸りのハイカラで、色は白く、頭の毛は綺麗に分けて水の垂れる様な立派な男振りであつた。誰であつたか教室の中で口笛を吹いて叱られた事があつて、恐しく威嚴のある良先生と思つたが、今は年のせいか白髪が髻にまで見へて來て昔日の儂がトントなくなられた。

◎塑造の先生は黒岩「淡哉」先生で、色の眞黒い疣蛙の様な顔をして、靜かに薄水を踏む様な足取りでスツツと教室へ這入つて來るので茶目連は大に閉口したが、然し叱言は決して云はず、何時もむつりとして居て苦蟲を嚙殺した様な面をして居て假入學中は一度も先生の言葉を見た事が無つた。只廻つて來て直し乍ら上手いと一言云ふ位が關の山で決して物を云はぬ人で後に「人魂」と^{あたま}綽名が附いたものだ。然し好きな先生の一人であつた。今は大阪下りをやつて居るが江戸兒で食道樂の先生だつた。尤も其外にも道樂が在る、それは何でも四十年頃であつたらう、博覽會や何かで先生大分懷中が暖くなつたので、例の江戸兒氣質がじゆつとして居られず、池の端邊へ時々遊びに出懸けたが、奥様への口實に困り、丁度其時玉寶堂の文珠様を作つて居たので、三晩も流連して居た申譯を彼の無口の先生の重い口から、實は奈良に文珠様を見に行つて居つたとの苦しい云譯は、其先生よりは傍で聞いて居つた某氏は、飛んだ池の端の文珠様に御通夜をしてゐたのにと可笑しくつて腹を痛くしたそうだ。

◎日本畫の方は「荒木」寛畝先生や、「川端」玉章先生が時々見えた。外に一二の助手先生も廻つて來た。寛畝先生は童顔白髯の大男で老大家と云ふ風采、玉章先生の方は田舎育ちの私共にもへ

んに見へる位全くの太郎面であつた。彼で日本一の先生かなあと、見れば見る程口が曲つて居り、目が跛で滑稽至極な御面相には全く恐れ入つた。何時とは無しに綽名が「鷹養」とつけられたがうまい事を云ふ人もあればあるもので、乍然繪筆を取つて没骨等をやると眞に神術とまで思はれた。其筆の使用法の巧みな事、穂尖、腰と、元との使ひ分け等は實以て驚くの外は無かつた。

◎假入學中は實技練習の傍ら、てんでに何科に適するか何科を撰ばんかと頻りに苦慮して居た、で時々洋畫や、彫刻や、日本畫の本科生の各教室を見學に廻つてゐたが、其時分に裸體の「モデル」を使つて居る部屋へ這入つて、初めてモデルを見た時は、眩しい様な、恥しい様なむづかゆい様な、何とも云へぬ氣になつた、自然ソツポを見る様な氣になる、しかしまともに見る事が出來ないんだが其癖見たくて仕様がなく、彫刻や、洋畫の教室へ頻りに見に行つたもんだ。日本畫や圖案科の教室等は一度しか見に行かなかつた。餘り度々になると氣まりが悪いから多勢の跡に附いて行つて、人の後からそうつと見る。それからとう／＼モデルを何時も使う科を撰ぶ事にした。考へて見れば今となつて金儲が妙いとか、収入が無いとか云へぬ譯だ。道樂に自分の好きな仕事をやつて居て、金が取れぬとて文句を言はれた義理で無い。

◎六月末に假入學期は濟んで、撰んだ科には大抵は入學を許された。七八の二月は夏季休業で、九月の始めに豫備科「予備の課程」に編入される。豫備と云ても、今の一年生と同様に變つた事は無い。午前は實技をやり、午後から三時間位は學科があるので仲々呑氣で無い。で在學中に私等が世話に成つた先生の中

で、今でもはつきり印象に残つて居る人々は、黒田「清輝」、久米「桂一郎」、關「保之助」、大村「西崖」、白井「兩山」、高村「光雲」、岩村「透」の諸先生等である。

◎九月早々豫備科「予備の課程」へ新入の者は、大講堂（第一講義室）に集められて、正木校長が「エー」を連發する事三百八十七度で、約一時間半許り話されたが、要は至つて簡單で、諸君を今豫備科「予備の課程」へ入れてやつたが一年の後に實技に見込が無かつたら、どん／＼出してしまふ、又君等の方でも見込が無いと思つたら、自分から出て行けと云はれた。が其時の仲間が四十年に七十餘人卒業したのを見ると、皆自分から見込がある者と思つて居たものばかりな筈だからあきれてしまふ。校長の話の内、も一つは、本校は他の専門學校と違つて幾百幾千人の内から只一人の名人を出しさへすればよいのであると云はれた。此一言のみはうまい事を云ふと思つた。實際に於て此一言を金科玉條として尊重すれば、正木校長も立派なものだが、今頃に成つても學制の改革「大正五年の本校改革運動勃発以後、根本的改革の必要性が云々されていた。」を得やらぬとは腑甲斐ない。糞落ち附きに落附て教壇に立つて「エー」の連發を今に續けて居る點だけは相變らずだ。

◎それから階段の脇の小さな、第二講義室へ引張込で彫刻の元老高村光雲先生が、彼の美髯を撫しつゝ低い調子の江戸辨で、彫刻の將來有望を解き、殊に木彫は洋風の建築が追々流行して來る故に、其裝飾彫刻が等と盛に引出論を述べられる。然し校長の「エー」の長談議の後で、一寸三十分間位の處で簡單にやつてくれた

のは嬉しかった。其時だけは先生は日本一の名先生に見へた。彼の肥つた軟かな様な肉附で、丸いコナシの浅い様なお顔に小さな美しい鼻、意氣地の成さそふな口、象の様な優しい目で、眉毛は兩端が八の字形に下つて居つて、彼のじり／＼と縮んだ美髯は、額の廣さと相俟つて立派な堂々たる風采で、田舎者を驚かすには持つて來いだつた。

◎デッサンの時に毎週御厄介になつた黒田先生は、其頃も今も少しも變りが無い様で、おつむりは今と同じく光輝を放つて居られた。其頃學生仲間でお歳は幾つ位だらうと云ふ話が出て、五十七八から六十四五かと云ふ所に決つたが、どうしてまだ其時は三七の寅歳だと後で判つた時には驚いた。乍然メートル「黒田の愛称」の威勢は今も昔も同様で、大したものであつた。先生がデッサンの時「光り」が等と云はれると、心中可笑さに耐えず、「イルミネーション」「光」等の綽名は免れ無い處であつた。

◎學科の先生方の内で、最も評判の善かつたのは岩村先生で、彼の煤ほけた第二講義室も先生の時には明るい、愉快な部屋になつた様な氣がした。何様田舎者が始めて先生の西洋美術史を聞いたときには、全く度膽を抜かれた。歐羅巴だけで無く、東洋の事も現在の事迄も論評されて、而して口癖の様に生意氣に成れ、確りやれ、君等が日本の美術界を背負つて立たねば駄目だ、と叱咤激勵すると云ふ風で、東西古今の美術の盛衰存亡を、縦横無盡に頭の悪い我々美術學生に覚え易き様、面白可笑しく説き去り、述べ行く有様は、實に流暢で、而もあの痛快な熱辯は聴く者をして質問の違も無く、二時間の講義ももう濟んだかと思ふ位であつた。

そのやうに先生は子弟の教養には甚だ努めて、生徒の受けも校中第一であつたが、其代りに同僚の美術家の作品に迄、犀利なる論評を下すので、多少の反感を抱かれて居た様で、中には凡骨な人の之を怨むものもあつたが、先生は正しい定義を下したのであると云つて平氣であつた。

◎此の率直明快な處が青年に喜ばれた譯で、殊に先生の肝入で催された彼の美術祭「明治三十六年」の快學は空前絶後であつた。

惜しむらくは春秋に富む先生は今や亡い。哀しい事だ。然し先生から魂を吹き込まれた幾百の青年美術家の内には、多少骨の有る者もなければならぬ、それ等の人によつての美術界革新を地下の先生は祈つて居られるであらう。

◎關先生は日本の風俗史を受持つて居られた。御蔭で今でも製作の上に都合の宜い事が度々で、只先生の講義は餘り多く知つて居られる爲か、御饒舌が多くペンを走らす者は何時も困つて、なる可く要を得て簡単に願ひたいと思つたものだ。

◎感じの悪い講義振りは大村先生で、鑑眞和尚と來ると厭に成つた。第一聲が氣に喰はぬ。然し近頃は尙飛ぶ鳥を落す勢だそうだから我々は早く卒業して居て仕合であつた。次に感じの悪いのは白井先生で、此先生は僕等の入學當時には居らなかつた。何でも二年生時代に歸朝されたので、歸朝早々作られたバケツを提げた裸體女の像は其頃の吾人の目にさへ拙く見えた。只其時迄油土を使つて居たのを普通の粘土に改められたのは確に氏の土産の最なる物であつて、價も廉で指の動きも軽く誠に結構な事であつた。猫脊で、下唇を突き出して、酒の香りをプーンとさせて教室にや

つて来る風采は餘り好い圖では無く、其當時から人氣の悪い先生であつた。

◎解剖學と、西洋考古學で毎年生徒が閉口して居るのは久米先生の講義と試験で、普通の講義の時には牛の涎の様にだらだらで、面白くもをかしくもなく、二時間の間鐘の鳴るまでやるので困つた。然し此解剖と考古學は私共到大變役に立つので、今更ながら有難く思つて居る。先生の身になつて考へて見ると、如斯學術的な事は別に面白くやり様の無く、只詰込主義の物らしいが、其時間には彼所の隅でも此所の方でも居睡や欠伸が始まるのであつた。そして久米先生の試験振りが變つて居た。第一講義室の略圖が出来て居て、一々丁寧な君は何處へ着けと差圖して着席させ、そして表に姓名を記入するので三四十分もかゝつて先づやつと席が定まるのだ、序に云ふが岩村先生のは勝手に着席させて置いて、自分は教壇の上で椅子に腰を掛け、そしてポケットから大きな黒眼鏡を取り出して、兩脚を百五十度位な角度にふん張つてカンニングを防禦する様は仲々先生隅に置けぬと思つた。其結果はどうかと云ふと、久米先生の採點は辛ひ／＼満點と思ふた奴がやつと八十點か八十二三點で、岩村先生のは九十點九十五點は取れる、關先生のは毎年百點を取る者が一人や二人は有つた。そんな所からも關先生は生徒間の評判が頗るよかつた。

◎美術教育の爲に諸先生に云ひたいのは、何も學者を育てる學校じやなし、又如何に諸先生の様に學術がよく出來たとて、美術家の方から見たら、生た字引か、飯を喰ふ書物位にしか思ふて居ないので、要は學術の豪い人でも技術者としては何の役にも立たない、只必須科目としては結構だが餘り八ヶ間敷く試験をしない

で、必要な事を能く分る様に注意深く教授されたら、本科生の負擔が輕くなり學術を餘り勉強する必要も無く、充分に技術を練磨する事が出来るだらうと思ふ。卑近な例を掲げて見ても、洋畫、彫刻科を出た人々で相當な成績を擧げて居る人に、本科で學術の優れて居た人が幾人あるか勘定して貰ひたい。其多くは學校の撰科を出たか、稀れには片輪な研究所にて育つた人々の方が名作を多く出して居るではないか。無遠慮に、竿頭一步を進めて云へば、先生あなた文學術が出来た所で美術家として何に成りますか、と申上度なる。

⑥ 『東京美術学校校友会月報』創刊

校友会機関誌『校友会雜誌』は明治三十四年八月五日発行の第五号以後廃刊となり、本年六月二十一日、新たに『東京美術学校校友会月報』第一号が発行され、昭和七年十二月十五日発行の第三十一卷第六号まで発行が続けられた。左記は創刊号に掲載された正木直彦校長の發刊の辞である。

月報の發刊に就きて

正木 直彦

校下三百の少壯美術家各志す所に隨て其の師門を異にし其教室を別にするか故に五年間の長日月朝夕同じき校門を出入し同じき食卓に就きながら終に道途の人にして了るの奇觀あるを免れず。かくの如く個々に孤立する事は技藝を修練する上にも道義を切削する上にも其の不利不便宜ふ可からざるものあり。是に於て校友会